直接性・媒介性・二重性

―― ヘーゲル『精神現象学』における、「自己意識」から「理性」への移行の、分析的解明 ――

小川　貴史

序

1）ヘーゲルの『精神現象学』は、自然的な意識が真なる知としての学にまで高まる過程を叙述したものである。そしてその学へと高まった知の在り方とは、「知が自分自身を超える必要はなく、知が自己を発見（57）」[(1)]するところで達成される、「対象が概念に一致する（57）」、あるいは即自存在と意識に対する存在とが一致するような知の在り方である。

こうした、対象と概念の一致、あるいは即自存在と意識に対する存在の一致（以下単に「一致」と称する）は、一応は[(2)]意識が「理性」になったときに達成される。『精神現象学』の章立てで言うと、「（C）（AA）理性」（＝「Ⅴ.理性の確信と真理」）の最初段階である。だから、「理性」の成立は、『精神現象学』全体にとって、極めて重要な位置を占める。

2）ところが、この理性の成立には些かの問題がある。理性の成立は、その前段階である「自己意識」がその自己吟味を貫徹した果てに生じる。その自己吟味は、「自己意識」が自分の様々な在り方（形態）の各々を次々に吟味に晒して、否定していく、という仕方で行われる。

しかし問題は、この自己吟味が本当に「遺漏なく」行われているかどうかということである。ヘーゲルはなるほど、『精神現象学』の「緒論」において、「現実的ではない意識の諸形態の遺漏のなさ（Vollständigkeit）は進行と連関の必然性によって自ずと明らかになるだろう（56）」と語り、そしてこの引用以下で、自己吟味が原理的に遺漏がないことを証示している。そして「（B）自己意識」の章においても、遺漏がないというつもりで、「欲望」「主性」「奴性」「ストア主義」「懐疑主義」「不幸な意識」という意識の諸形態を

実際に吟味しているのであろう。だがこのヘーゲルの独特の言葉使いからは、これで本当に自己意識の全形態が吟味し尽くされているのかは、我々解釈者には明白なことではない。そしてこのことが明白でないならば、自己意識から理性への移行もまた、十分納得のいくものではないことになる。

そこで我々は当論文において、自己意識が本当にそれ自身の意識形態を網羅的に吟味し尽くしているのかを検討していくことにする。而して、上に言ったことからすれば、これは同時に理性が成立しているかどうかを検討することであり、ひいては『精神現象学』の目標である「一致」の是非の問題にまで食い込んでくるものとなろう。

３）そのために我々が採る方法は、以下のようになる。先ず何が充たされれば理性が成立するのかを確認し（第１章）、次に自己意識が出発段階（「（B）自己意識」章の初め）において持っている規定を分析して、自己意識の概念契機を遺漏なく網羅的に整理し（第２章）、更に「（B）自己意識」の章から「（C）（AA）理性」の章へと移行する箇所を読解し（第３章）、その叙述が「第２章」において整理しておいた、自己意識の概念契機の展開に他ならないことを示し（第４章）、第３、４章を総合して、自己意識の全概念そのものを展開させれば必然的に理性が成立することを結論として提示する（第５章、結語）。つまり、自己意識の概念を網羅的に展開させるとそこから演繹的に理性が導出されることを示す、あるいは、自己意識の概念を全て分析した結果、理性になった、ということを示すのである。これが「自己意識」から「理性」への移行を分析的に解明する、という、我々の当論文での目標の意味である。

１．「理性」とは如何なる知であるか

ヘーゲルにおける「理性」という語の指示する意味は、ある種独特の意味を持っている。通常の意味での「理性」は、感性に対する、概念的思考の能力や、認識を得る能力といったものを指す。勿論哲学史に少しでも通じた人にとっては、単に感性との対比で理性を特徴付けることには飽き足らず、理性が悟性や知性、判断力といったものとどう違うのか、ということが問題となるであろう。しかし日常的な語法の「理性」はそれほど厳密な意味を持ってはいない。ここでは、通常の「理性」の意味を、概念的思考や認識に関わる、人間の能力の一つとして、漠然と理解しておこう。

ヘーゲルの「理性」も、こうした通常の意味での「理性」と矛盾するものではない。だが、ヘーゲルの「理性」は、こうした通常的「理性」理解からは到底生じてこないような意味を有している。それ故、通常の「理性」に比べてヘーゲルの「理性」はあまりに限定

され過ぎた意味を持っていて、一体これのどこが「理性」なのかが全くわからなくなっているのである。こうした事が何故起こっているのかというと、筆者の私見では、ヘーゲルが理性を、通常の意味での理性よりもずっと高度な認識能力であると考えていたからである。

では、そうした限定され、独特の意味を持つ、「高度な」理性が一体如何なる知であるのか、あるいは何がヘーゲル的理性の徴表・条件なのかを見てみよう。

まず、理性の定義として、ヘーゲルは「理性とは、あらゆる実在性であるという、意識の確信である（133）」と述べている。これは「私」が同時にあらゆる実在性である、という確信である。そしてこの「私」は「単純なカテゴリー（134）」であり、「カテゴリーとは、自己意識と存在が同じ本質である、ということである（134）」とされている。要するに、理性とは「私」が同時にあらゆる存在でもあり、それはカテゴリーそのものである、という確信、つまりカテゴリーにおいてこそ「私」は同時にあらゆる存在と本質を同じくする、という確信である。もっと端的に言ってしまえば、「私」はカテゴリーである、という確信である。

とはいえ、この「カテゴリー」とはいったい何であろうか。ヘーゲルの「カテゴリー」は勿論カントの用語である「カテゴリーKategorie」に由来する。カントの「カテゴリー」とは、感性によって受容された経験の対象を思惟する形式としての概念の範疇（カテゴリー）である。カテゴリーを通すことで、感性的経験の対象は、思惟の対象となりうるのである。

そこで、このことから一歩進めて、我々の思惟の対象は、カテゴリーを通して得られた感性の対象だけである、と考えてみる。そうすると、思惟の対象はただ思惟形式（つまりカテゴリー）に対する在り方でしか思考されない、ということになる。対象とは「私」の対象なのである。こうして、ヘーゲルにとっては、カテゴリーは自己意識と存在との同質性を意味しているのである。

では、この「自己意識と存在との同質性」をもう少し解析してみよう。理性の真理はカテゴリーであり、カテゴリーとは自己意識と存在が同一本質を持つということである。これは二つの面に解析することができる。一つは存在が自己意識であるという側面であり、いま一つは自己意識が存在であるという側面である。

第一面は、「（A）意識」の章における意識の自己吟味によって明らかになったことであり、それは、それまで真理とされてきた他在としての即自存在が実際は意識に対してのみ存在するものである、ということである。例えば私の目前にリンゴがあったとして、このリンゴがリンゴとしてあるのは、ただ私に対して意識される限りのことである、ということである。他方第二面は、「（B）自己意識」の章において明らかになることであり、

それは、意識に対して存在するものが同時に即自的に存在するものでもある、ということである。同じ例で言うと、私にとってのリンゴは、その通りに存在しもする、ということである。

すると、理性がカテゴリーとして有する真理は、この両側面を共に備えた、「存在するもの、つまり即自は、ただそれが意識に対して存在する限りで存在し、そして意識に対して存在するものは即自的にも存在する（133）」という真理であることがわかる。つまり、理性が成立する要件は、即自存在が対意識存在であり、対意識存在が即自存在である、という二つのものなのである。先の例で言うと、存在するリンゴと私に対してあるリンゴが一対一に対応している、ということである。

ところで、我々が目標とすることは、自己意識が本当にそれ自身の意識形態を網羅的に吟味し尽くしているのかを検討していくこと、端的に言えば、「（B）自己意識」章の自己吟味の結果の検討である。だが上の理性の要件のうち、前者は「（A）意識」の章の自己吟味の結果の検討であるから、我々はただ後者について問題にして行けばよいことになる。

２．自己意識の概念の分析

自己意識は「（A）意識」の章における「意識」の経験から生成した、一つの運動である。この運動は、「自立性 Selbstständigkeit」と「否定性 Negativität」とから成る。ある統一されたものが自らを「否定」することによって自己を区別しつつ、その「否定」を再び否定し、自己を回復し、この自己は「自立」する。ここにおいて自己意識は自己完結的である。── こうした自己完結的運動をヘーゲルは「無限性 Unendlichkeit」と呼んでいる。無限性とは、自己から区別されたものと自己自身との「限界」が直ちに消失する、という運動そのものを捉えた概念である。

こうした無限性を自己意識の在り方が示すとき、それは自己意識が「感覚的対象」において「自己」を確信するという運動として語られる。感覚的対象が自己意識の区別・否定であり、そこにおいて見られる自己が自立的な自己である。

具体的に言うと、ヘーゲルはこうした自己意識の運動の一例として、欲望とその満足、ということを考えている。例えば、私が今目前にあるリンゴを欲したとしよう。これが欲望である。私がこのリンゴを欲しいと思っているとき、私はこのリンゴを「自分のものにしたい」と思っているのである。このとき、私に食べられるであろうリンゴは私の区別・私の否定としてある。そうして首尾良く私はこのリンゴを食べることに成功したとしよう。

リンゴを食べることで、私は自分の否定を否定し、自己満足を得ている。そうすると私はこのリンゴを食べてそれを否定することで、それを媒介として、自己の確信を得たことになる。

この例を援用しつつ、そこに出てくる「自立性」と「否定性」という自己意識の二つの側面から、自己意識を構成する、三つの概念契機が導出される。そして自己意識とは、この自立性と否定性とからなる、自己完結的な運動のことであるから、そこから出てくる概念契機は自己意識のそれらとして遺漏がない。

先ず、自己意識の第一の契機は、「純粋無区別的自我（108）」を対象とする、「自我は自我である（104）」という単に自立的な在り方、つまり否定性なき自立性としての「直接性 *Unmittelbarkeit*（108）」の契機である。先の例で言うと、リンゴを食べる前の私がこれである。私は自分の否定としてのリンゴをまだ否定していない。

だが自己意識は、こうした単純な統一においてとどまってはいない。自己意識は、上述のように、本質的には他在において自己確信する意識である。この「他在において」ということに従うと、自己意識の第二の契機は、自立性なき否定性、つまり他なるものを介して、他なるものを否定して自己確信を得るという、「媒介 *Vermittlung*（108）性」である。私の他者であるリンゴを食べることは、私の自己満足のための媒介的行為なのである。

ここで自己意識に自立性の確信を与える他在は、その限りではそれ自身については自立性を否定されている。だが自己意識が常に他在を必要とする以上、他在は自己意識によって否定し尽くせない自立性を有してもいる。だから自己意識と他在は共に、お互いを介しつつ自己へと戻り、それぞれが自由な自立者になる。これは否定性を含んだ自立性である。こうした事態をヘーゲルは、「二重の反省 die gedoppelte Reflexion（108）」と言っている。これを我々は「二重性」と呼んでおこう。これが第三の契機である。リンゴを食べるという否定行為によって得られた自己満足が、否定を含む自立性である。私は自立的である。だが私はまたリンゴが欲しくなる。リンゴは私がいくら否定しても、私の欲望の対象として登場する。だからリンゴもまた自立性を持っているのである。

以上のような、直接性・媒介性・二重性が、自己意識の三つの概念契機である。

３.「（Ｂ）自己意識」から「（Ｃ）（ＡＡ）理性」へ

さて、こうした概念に基づいて、自己意識は「欲望」「自己意識一般」「主性」「奴性」…という名称を持った、様々な意識形態を経過していく。そしてその結果、これらにおいては自己意識と対象とに別々に属していた「自立性」と「否定性」が、一つの自己意識の

みに属することになる。その最初の形態が、歴史事象との対応乃至類似から、「ストア主義」と称される。「（B）自己意識」から「（C）(AA) 理性」への移行部はこの「ストア主義」から始まる。それを以下で検討していこう。

ストア主義は自己の思考に引きこもる精神態度のことであるが、それは思考を本質としつつそれを自分の思考だと意識している。「私は他なるものにおいてあるのではなくて、端的に私自身にとどまっているし、私にとって本質である対象〔＝思考〕は私の、私に対する存在と分離されることなく統一されている（117）」。ストア主義はあらゆるものを思考しつつ、その思考が自分の思考であることを意識している。概念の上で、このストア主義の意識にとっては即自的な存在（即自存在）と意識のそれ自身での存在（対自存在）が一致している。

だがこの意識は自立性と否定性の直接的統一、あるいは「即自存在と対自存在の直接的統一（117）」にとどまる。丁度歴史上のストア主義が「何が善であり、真であるか（118）」という問いに対して、「内容のない思考そのもの（118）」、つまり「理性的であることに、真なるものや善なるものは存するはずである（118）」としか答え得なかったように、この意識形態は具体的な対象に対する内容を持たない、抽象的な思考なのである。換言すれば、対象の即自性を具体的に否定してはいないのである。

この意識は対象の即自性を具体的に否定し、それを自分自身であると確証しなければならない。これは前形態の現実化である。この新しい自己意識は即自存在の自立性を徹底的に否定しようとする。これは歴史的に言うと、「懐疑主義」と呼ばれる(3)。懐疑主義的意識はあらゆる即自的な存在（感覚的対象）を個別的に否定し、それらの本質を自己に置き、「自分自身の思考のアタラクシア〔安寧〕、自分自身の不動で真なる確信（120）」を手に入れようとする。言い換えると、個別事象を媒介として自己の普遍性を確証しようとしているのである。

ところが、個別的なものを否定する意識は、その限りでまた、個別的なものに関係してもいる。個別の否定は、個別の否定なのである。だからこの意識は自己の不動の確信を得るどころか、自己が個別と普遍の間を「彷徨（うろつ）くherumtreiben（120）」、「二重の矛盾した意識（121）」である。この意識は不動の自己確信を得ることができず、他なるものの否定を通して自己否定に陥るのである。

こうして、ストア主義の直接的確信においても、懐疑主義の媒介的確信においても、意識が自己を不動の普遍者ではなくむしろ動揺する個別者であることが、意識によって経験された。このことによって自己意識は新しい形態になる。この形態の自己意識は、「単純で不動なもの das einfache unwandelbare（122）」が自分の真のあり方、つまり本質である

ことを知ってはいるものの、同時に自分は「多様で動揺するもの das vielfache wandelbare (122) 」であると自覚し、「非本質的なものになっている (122) 」。つまりこの意識は自分がその真のあり方にはなり得ないことを知っている、自己矛盾乃至自己二重化の意識である。故にこの意識は「不幸な意識」と呼ばれる。

だから不幸な意識は自分の本質である不動なものを自分の彼岸として持つ。彼岸であるから、「不動なものと一つになろうという希望は、希望のままで、つまり充実と現在を得ることのないままに、とどまらざるを得ない (124) 」のである。

だからこの意識が不動なものへと高まろうとしても、逆に「この高まりは直接的に反対の意識であり、個別性としての自分自身の意識である (122f.) 」という結果が生じるだけである。不幸な意識は己れ自身の個別性のみを対象に持つに過ぎない。不幸な意識は、このように根本的に不動者たり得ないという意識、言わば「自分自身の無の意識」(4)、自己否定の意識なのである。

だがここで意識の対象となっている個別的なものは、本来的には意識の本質である、不動なもの自身の個別的形態である。というのはこの、意識の対象となっている個別的なものは、意識が不動なものを求めようとしてはじめて生じるものであるからである。だからこの個別的なものは意識自身の個別性であると共に、不動なものの個別化した形態、「不動なもの自身が…自分で備えている (123) 」、「意識に対する個別性 (123) 」でもある。故にこの個別的なものは個別側にいる不幸な意識と普遍側にいる不動者との間の〈媒介者〉である。つまり意識は直接的に不動者となることはできなくとも、その不動者の個別化した形態において自己を確信することは可能なのである。ここに、図式的に言えば、〈個別者（意識)〉－〈媒介者〉－〈不動者（彼岸)〉という推理連結の構図ができあがっている(5)。

こうして、不幸な意識は、自分では自己否定を行いながら、まさにそれによって自己と不動者との間に媒介的関係を取り結ぶのである。だからこの自己否定を貫徹することが、同時にこの意識に不動なものとの統一の意識を与えることになる。

ではそうした、自己否定の貫徹は、一体どのようにして行われるのであろうか。不動者が不幸な意識にとって彼岸であり、絶対に到達し得ない ── こう考えているだけでも、不幸な意識は自己否定を行っている。しかし不幸な意識の自己否定は、もっと徹底している。

不幸な意識は自己否定の意識である。だから上で言った〈媒介者〉もまた、彼岸である不動者によって一方的に与えられるものとして理解されている。不幸な意識にとって、この〈媒介者〉は最早自分自身の個別性ではない。不幸な意識は、この〈媒介者〉が自分自身でもあるとは思っていない。〈媒介者〉はあくまで不動者によって与えられる、不動者

が形態化したものである。要するに、不幸な意識は不動者によって与えられないことには、不動者の形態化した〈媒介者〉に出会うことすらできないのである。イポリットがこうした〈媒介者〉を神の受肉（歴史的キリスト）と考えた所以もここにある(6)。人間が神に対峙するのは、ただ神がキリストとして受肉する限りのことなのである。

それでも不幸な意識は不動者によって〈媒介者〉を与えられることによって或る一定の享受に与っているし、またそもそもこの享受は、不幸な意識が自己否定をしようと決心することがきっかけとなって得られるものである。だから不幸な意識は己れの否定を徹底するべく、こうした自己の享受と決心を全て放棄する。こうすれば、不幸な意識は自分を全的に否定しきっている。イポリットはこれをキリスト教徒の苦行として説明している(7)。

こうして不幸な意識は自己否定を貫徹した。自己否定を貫徹した自己意識によって、全てが不動者に委ねられている。不動者は全的に肯定されている。しかしながら自己意識の対象であるこの不動者をこうしたものにしたのは、他でもない自己意識自身である。つまり自己意識こそがこうした完全なる不動者を形成し、自己意識こそが実在なのである。自己意識が自分を何ものでもなくすことによって、何ものをも形成してしまっている。ここに第１章で見ておいた「対意識存在が即自存在である」という理性の用件が成立している。意識がこのことを理解するとき、自己意識には「あらゆる実在性であるという確信」が生じている。そしてここにおいて自己意識は理性へと移行するのである。

４．自己意識の概念と、「ストア主義」「懐疑主義」「不幸な意識」

さて、第２章で我々が見たことは、自己意識が、直接性・媒介性・二重性という三つの概念から構成されているということであった。そして今見てきたことから、「ストア主義」「懐疑主義」「不幸な意識」はこの三つの概念にそれぞれ対応している(8)。

直接性とは、自己意識が他なるものの否定なしに「自分だ」という確信、つまり自己の自立性の確信を持っている状態のことであった。これが自己意識において一つの形態をとると、それは「ストア主義」という形態に他ならない。というのはこの形態は、対象を実際には否定していない、否定なき自立性であったからである。

また媒介性とは、直接性を脱して実際に他在を否定することであるから、「懐疑主義」に一致する。「懐疑主義」は「ストア主義」において抽象的でしかなかった他在の否定の実行であるからである。

そして、二重性とは、否定した他在そのものが、自己意識と同様自立性を保持していることであり、自己意識から他在が逃れ行くことであった。これが自己意識の形態として現

れると、不動者を捉えられない、不幸な意識となる。

従って、ヘーゲルの自己意識は「ストア主義」から「不幸な意識」までを吟味したことにより、自己意識の概念が展開した在り方を全て吟味し尽くしたことになる。つまり自己意識の吟味の網羅性は今確認された。しかしながら、我々はもう一歩進んで、この自己意識の網羅性から何故理性の「全実在性である」という確信が生成するのかを見ておかねばならない。何故に、自己意識が自己を網羅的に検討すれば、自己意識は理性へと移行しうるのであろうか。── ただしそれは実は我々が今まで検討してきたことの中に包蔵されている。それを次章及び結語で発掘していく。

５．自己意識の吟味の網羅性と、理性の成立

自己意識の自己吟味の網羅性は、理性の確信を包蔵している。結論を先取りしていうならば、自己意識から理性への移行とは、自己意識の普遍性がその抽象性を脱し、具体性を帯びた確信へと変貌していくことである。要するに、普遍性の具体化、深まりが、自己意識から理性への発展の徴表（メルクマール）である。我々はその深まりを、①「ストア主義」と「懐疑主義」の崩壊の段階、②「不幸な意識」の成立の段階、③「不幸な意識」の結果の段階、の三つの段階に分けて見ていこう。

①先ず、「ストア主義」と「懐疑主義」の崩壊の段階であるが、これは普遍性の確信が崩壊する段階である。「ストア主義」と「懐疑主義」は、上述のように、ともに崩壊する。「ストア主義」も「懐疑主義」も、自己意識が他在を否定して自分自身は不動なものとして存在しているという確信、つまり自己の普遍性の確信を持っていた。それが今崩壊している。ということは、このことは、自己意識が最早普遍的なものではないということを意味している。

②不幸な意識はこうした、自己意識の確信の崩壊を自己意識自身が認めることから出発する。不幸な意識は、他在が否定しきれないものであることを知っている。それが「懐疑主義」における経験の内容であった。だから自己意識は、他在の否定によって自己確信を得ることが最早できない。

そうすると、他在の否定によって自己確信を得ようという自己意識の在り方そのものがもう破綻している、ということになる。自己意識は、最初に自分が持っていた、自己自身の規定を全て喪失してしまう。「不幸な意識」の成立の段階は、自己意識が他者否定の不可能性を知ることで自己否定へと移行する段階である。あるいは、自己意識の確信としての普遍性が崩壊して、自己の個別性を自己意識自身が認めるようになる段階である。

不幸な意識は自己確信を得ることができない。この意識は己れの普遍性という真のあり方を彼岸に置き、自らを個別的なもの、つまり真ならざるものであると考える。要するに、不幸な意識とは自己否定の意識である。

③しかし、既に見たように、この自己否定が徹底されることは、自己が肯定されることでもある。── 自己の全き否定は、彼岸である不動なものに完全性を与える。自己意識自身は無と化し、その代わり自己意識の彼岸は完全なるものになっている。しかしこの彼岸は、自己意識自身が立てる、自分の真のあり方である。彼岸は自己意識が自分で立てたものなのである。だから結局自己意識は彼岸に完全性を与えることによって、彼岸であるところの、自己の真理を実際は完全なるものにしているのである。言い換えると、自己意識は自分自身の普遍性を彼岸として対象化、つまり具体化していたのである。こうしたことを自己意識自身が了解するならば、あらゆる存在が自己意識によって定立されているという確信、つまり「あらゆる実在性である」という理性の確信が生成するのである。「不幸な意識」の結果の段階とは、このように自己意識が自己否定から自己肯定へと還帰する段階、あるいは個別性としての自己認識から普遍性としてのそれへと戻り行く段階なのである。

結語

自己意識の網羅性とは、自己意識が自分の持つ概念に従って生じる全意識形態を吟味することであった。つまり「直接性」「媒介性」「二重性」という三概念に基づいて「ストア主義」「懐疑主義」「不幸な意識」を吟味すれば、「自己意識」は網羅されている。

この網羅性がもたらすことは、何であろうか。先ず自己意識が自分の普遍性の確信を喪失し、それによって己れを個別性として意識すること、つまり不幸な意識である（第５章の①～②）。しかるにこの自己否定的な「不幸な意識」には、かえって自己の肯定への道、つまり自己の普遍性の回復への道が開かれる（第５章③）。これが理性の成立である。

以上をまとめると、自己意識の網羅性は、①自己意識の普遍性を崩壊させ、②自己意識の在り方そのものを破綻させることで、③自己意識に自己の否定を自覚させるからこそ、④自己意識の彼岸が全的に肯定され、⑤ついには「あらゆる実在性である」という理性の確信がもたらされる、ということになる。従って、自己意識から理性への移行は、結局は自己意識の網羅性に端を発している。ここに、自己意識の網羅性が、自己意識から理性への移行を必然的にもたらす、ということが証示された。

理性が成立するには、自己意識が先ず単に抽象的でしかない己れの普遍性の確信を捨て

去り、己れの個別性を自覚することが必要だった。自己意識は即自的には普遍的なものではあるが、同時に自己意識はその即自的普遍性を、自らの手で充填して行かねばならなかったのである。

そうした「充填」の作業によって自己意識が自分自身を普遍的なものであると確信するとき、理性が成立する。そして「（C）(AA) 理性」以降の過程においてやがてはこの「充填」は全うされるであろう。

註

(1)『精神現象学』からの引用は全て、マイナー社の大全集 Gesammelte Werke の第９巻から行(おこな)った。数字はそのページ付けである。

(2) 「一応は」と言ったのは、意識が「理性」になっても、『精神現象学』はその目標を全うな意味では達成していないが故に、『精神現象学』の叙述はまだ続くからである。具体的に言うと、「意識は即自存在、つまりその対象との関わり方を、様々な仕方で規定するだろう。それは、ちょうど自己を意識する世界精神のどの段階に意識が立つのかに応じてなされる（134）」とあるように、意識が世界精神（歴史や宗教史のこと）の全段階を網羅し終えるまで続く。

(3) 懐疑主義的な態度は、単に意識の一形態としてあるのみならず、『精神現象学』の緒論にもあるように、『精神現象学』全体を貫く、意識の根本態度である。この、自己に対する徹底的な懐疑の態度が意識自身に備わっている在り方を「弁証法」という。

(4) Hyppolitte, J. ; Genèse et Structure de la Phénoménologie de l' Esprit de Hegel, Paris, 1946 (192) .（イポリット『ヘーゲル精神現象学の生成と構造』市倉宏祐訳、岩波書店、1972年。）

(5) こうした構図を、イポリットやヴァールは主にキリスト教の意識として理解している。Hyppolitte, J. ; *ibid.* / Wahl, J. ; Le Malheur de la conscience dans la philosophie de Hegel, New York and London, 1984. だが私はそうした歴史的背景を「不幸な意識」に読み込むだけではなく、むしろ次のことを指摘しておきたい。即ちここで述べている推理連結の構図は、「Ⅲ.力と悟性」における、現象を通してその背後に彼岸的に存在している内なるものを見る意識の構図と全く同様である、ということをである。即ちヘーゲルは「（A）意識」の章（「Ⅲ.力と悟性」で終わる）から「（B）自己意識」の章への移行と、「（B）自己意識」の章（「不幸な意識」の部分で終わる）から「（C）(AA) 理性」の章への移行を同様の図式でもって捉えていた、ということになる。

(6) Hyppolitte, J. ; *ibid* (194) .

(7) Hyppolitte, J. ; *ibid* (206) .

(8) 「対応している」と言っても、それは何も「B.自己意識の自由、ストア主義、懐疑主義、不幸な意識」に限ってのことではない。「A.自己意識の自立性と非自立性；主性と奴性」の最初に出てくる、自己意識一般の論述においても、また「主性」と「奴性」という自己意識の形態においても、この対応は見られる。ただ、「ストア主義」以降は、それまで別々のものに属していた、意識の自立性と否定性が、唯一の意識に帰属するようになっている点で、両者は異なっている。そしてこの意味では「ストア主義」以前はそれ以降にとっての準備段階であり、前者は後者に契機として吸収されていると考えることができる。従って「（B）自己意識」から「（C）

(AA) 理性」への移行の考察としては、「ストア主義」以降を扱えば十分であるということになる。

〔西洋近世哲学史博士課程・日本学術振興会特別研究員〕

※本論文は、文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。